

カナダバンクーバーにありて想う 白門の頃、そしてわが人生……

(1958年中央大学経済学部卒業
ナショナル日系博物館・
ヘリテージセンター前理事長)
林 光夫
Mitsuo Hayashi

は、当時学校で活動が禁じられていた武道を除く大抵のスポーツはこなし、高校時代から続けてきた登山活動も、在学中、山友達と毎年夏に南アルプスや中央アルプスの登山・縦走など楽しんだことが思い出されま

す。
「これからは国際時代：」
卒業の年の渡米

私が経済学部を卒業したのが、1958年（昭和33）ですから今年で社会人生活47年になりますが、仕事の関係で、その内ニューヨークで14年（2回滞在）、バンクーバーで11年（2回滞在）を過ごし、93年に退職してから12年バンクーバーに住んでいるため、北米生活が長く、日本では10年だけです。現在は退職して悠々自適の毎日と申上げたいのですが、後述のごとく現役時代にも匹敵するような或はそれ以上に多忙な毎日を送っております。

学生時代の宝くじ

生まれ育ちは長野県飯田市ですが、飯田高校卒業後上京し、中央大学経済学部で54年に入学しました。学生時代はごく平凡な生活を送ったと言えますでしょう。奨学金3000円が支

給され随分助かった思いがあり、2年からは中央線中野駅南口で宝くじ売りしたのを中心に幾つかのバイトをしました。3年と4年には大淵彰三教授の西洋経済史ゼミが懐かしく思い出されます。歴史が好きであった私は近代経済をこの様に発展させてきた歴史を、大淵先生の行届いた授業のもとで楽しく学びました。

宝くじの売上げは、初日と最後の2日間で大半が売れるため、ボスに勝手を言つて、毎回3〜4日それも午後2時ごろからという時間で売店を出すという生活でした。でも月額で当時の新卒の手取額に近い収入があったため、奨学金と併せ、期末試験時にはバイトをしなくて済む学園生活でした。これらのバイトの日は大淵ゼミとぶつかると先生のご了解を得て失礼しましたが、先生が当時

中野駅南口の先にお住まいでしたので、バイトの店先を敢えてそ知らぬ顔をして通られたのを今でもはつきり思い浮かべます。
在学中は学Y（学生YMCA）の会員として過ごせたことも幅広い友人層ができて良かったです。聖書研究、毎年行われた修養会への出席、交わした様々な議論など、指導してくださった諸先輩や同僚等の懐かしい顔々が思い出されます。また、3年の秋、200チームが参加した学内対抗野球にクラスの野球好きが集まり、テンス（Tenth）というチーム名で参加しました。私はファーストとして常時出場し、堂々たる優勝を飾り総長杯を受け取った喜びは大変なものでした。また文連対抗野球では学Yチームの一員として出場、これも優勝しました。中学高校時代

大学3年の秋、そろそろ就職のことが気になりだした頃、故郷飯田のキリスト教会牧師で、私の人生の良き助言者の一人であった高橋三津平牧師から、当時ニューヨークから帰国されたばかりの通産省技官の方を紹介されました。その方は、「これからは、世界で活躍する時代だ。人を紹介して上げるからニューヨークへ行つたら」と勧め、ニューヨークにいる知人を紹介する労を取つて下さいました。その頃は特に個人による渡米は簡単ではなく、現地の個人または企業からの招聘あるいは入学許可が必要でした。しかし招聘状はなかなか届かず、ほぼ一年かかりま

はやし・みつお

1934年、長野県生まれ。中央大学卒業後海外に渡り、日本鋼管バンクーバー事務所所長、NKリーシング社ニューヨーク副社長などを歴任。退職後、日系プレス・プロジェクトに参加し、ナショナル日系ヘリテージセンター協会理事長。現在同理事のほか、日系プレス基金理事、BC州日加協会理事、日加ヘルスケア協会副会長、などの要職で活躍している。



今年71歳。円内は中央大学2年生、19歳の時のもの。当時はみな角帽でした



した。
そして

ニューヨーク
入りののは
大学を卒業し
た年のクリス
マス直前だし
た。しかし渡

航前抱いてい
たイメージと現実との落差は大きすぎました。招聘してくれた会社は、日本からの工芸雑貨類の輸入・卸業者でした。しかし、いろいろな事情があり、会社は1年程で解散し別の企業で働くはめになりました。今考えてみると経済面も含め私の人生の中で最悪の状態であったと言えます。しかしそのような中で、61年来国籍の恵美子と結婚し、このような環境をどのように改善できるか二人で考えた末、大学院(夜学)で勉強しようということになりました。そのような折、当時通っていた、日米合同教会の牧師の紹介で、日本鋼管(当時)ニューヨーク事務所の現地備員として採用されました。

ドラッカー教授の講義

新しい勤務環境にほぼ慣れた63年からニューヨーク大学大学院のビジネス・スクール夜学部へ入学。昼間の勤務が終わってから、週2〜3回の授業を受けるのは容易ではなく、大変な苦学の末、4年半かけて無事卒業できました。有名なピーター・ドラッカー教授の経営学の講義は大変印象深く、また多くの先生方から当時としては最新の経営学・マーケティング手法を修得。そしてこれは、恵美子の献身的な協力なくしては実現できなかったことです。私が出張や病気で授業に出られない時は、担当教授の了解を得て、彼女が代理出席してくれ、これにより本人は出席扱いとなりました(古き良き時代?)。そして、毎回提出のケース・スタディ報告、期末レポート、最後の卒論も当時の手動のタイプライターを使い殆ど一人で打ち込んでくれました。将に内助の功による二人三脚で、本当に感謝しています。

この間、社内の待遇も変り、当時と

しては大変稀でしたが、正社員となり69年に本社勤務(広報・鉄鋼輸出)。その後、バンクーバー(事務所の開設)、東京(プロジェクト営業)、バンクーバー(所長)、そして東京經由後ニューヨーク(子会社の北米責任者)と転々とし、大きなプロジェクトを受注したり、撤退作業をしたりと色々経験後、93年に退職しバンクーバーへ移住しました。

好きな旅行とゴルフやめて

90年、2回目にニューヨークへ赴任する折、最初のニューヨーク時代に、ぼっと出の田舎者に対し親切にお世話を下さった教会の一世や二世の方々、少しでも恩返しをしたかと思っておりました。然し、事前に相当程度判ってはいたが、ニューヨークへ戻ってみると、かつてお世話になった殆どの方々が、亡くなられたり別の場所に移られたりして、感謝の気持を殆ど表せない「不完全燃焼」の気持でバンクーバーへ来ました。退職後は、予てから考えていた、それまで訪れる機会が無かった



で、当地の有名なテレビ・キャ
パーティー(中央)と
らるパーティー(中央)と

世界各地への旅行、好きなゴルフなどを恵美子とともに楽しむ計画を持ち、着々と実行し始めていました。

最初の数年は、将に年5、6回の各地への旅行、そしてゴルフなどに殆どの時間を費やしました。その一方で、地元バンクーバーの日系の人達から、日系プレスと言う日系の集いの場、高齢者の集合住宅の建設プロジェクトを実現したので募金活動に協力して貰えないかとの要望があったので、「旅行やゴルフなどの合間で良ければ」と気軽に引き受

カナダ日系人の辛苦：加政府 謝罪・補償を機にプロジェクト

きました。しかし、物事を中途半端に出来ない性格からか、最初の3年ほどは、将に遊びの合間にやっていたボランティアの募金活動や事務局の管理業務が、プロジェクトが進捗するに従い多忙となったため、旅行とゴルフの時間はほとんど減り、99年から、いわゆる観光旅行は皆無となり、この2年間はゴルフ・クラブも握っていない有様です。

バンクーバー地域は、カナダの西海岸に位置する関係で、19世紀の終わり頃から北米への主要な移住先あるいは上陸地の一つとなっていました。戦前カナダには約2万3000人、うち太平洋沿岸に約2万1000人の日系が在住していました。そして第二次世界大戦中に日系の人々が、カナダ生まれの市民権を有している者も「敵国籍市民」とされ、財産を

没収、強制収容され、身の回りの物だけを持っただけで、海岸線より160キロ以上内陸への移動を余儀なくされました。そして終戦間際になり、さらにカナディアン・ロッキイー以东への移動や日本への追放が行なわれたため、当地の日系コミュニティは壊滅状態となりました。戦後4年経って西海岸へは戻ることが認められたものの戻ってきた人は半数以下で、以前の活力を取り戻せなくなっていました(このカナダ政府による、戦時中、戦後の日系に対する処遇の詳細は割愛しますが、米国のそれとは大きく異なり、大変厳しいものでした)。このため、当地では、コミュニティの集いの場、シニア対策も不十分なまま歳月が過ぎ去って行きま

した。それが、1988年のカナダ政府による日系カナダ人に対する謝罪、補償金交付の実施がきっかけとなり、それに新移住者が加わり、バンクーバー地域の日系の人口が3万5000人以上となったことにより新しい動きが始まりました。そして当地の

代表的な日系の諸団体が纏まり、二世・三世を中心とする20人ほどが原動力となり、プロジェクトを計画し、募金活動を行なった結果、日系プレスへの土地購入(95年)、高齢者独立型集合住宅(98年)、日系ヘリテージ(文化)センター・博物館(2000年)、そして最後のプロジェクト、ケア付き住宅(02年)と段階的に完成・オープンできました。総額約20億円(2100万カナダドル)で、2つの共同住宅(アパート)の建設費は土地代を除き州政府住宅公庫からの借入金で対応しておりますが、ヘリテージセンター・博物館の建設費七億円の殆どは個人・企業からの寄付金により賄われました。北米各地の日系コミュニティでは早い時期から、いろいろな形で文化センター、博物館、シニア向け住宅、養老施設が設立・運営されており、その点、当地は最も遅い地域の一つでしょう。

それぞれの施設の規模は、決して大きくないが、ヘリテージセンター・博物館、庭園、高齢者向け集合住宅

とケア付き住宅を1・2ヘクタールの同じ敷地内に集めた複合施設というのが日系プレースの特徴です。これにより、2つの集合住宅で生活する平均年齢80歳後半の高齢者たち、センターの25以上に上る各種週間プログラムや特別な催しに参加したり博物館を訪問する老若男女、センター内の日本語学校へ通う子供たち、日本レストランへ食事に来る人たちなど数世代にわたる日系と非日系の人々との交流の場／コミュニティを造りたいと言う当初の目的が達成できたことは本当に喜ばしいことです。

このような建設プロジェクトにほぼ最初から参加・協力できたこと、そしてこれらが完成し、その運営でも色々な形で奉仕できることは、私たち夫婦にとり大変光栄なことです。これらの奉仕・ボランティア活動は、当然のことながら、文字通り手弁当・持出しで、各地への出張費、会合費などは全く支給されません。

当地へ移住してから会員となっている、日系人合同教会は、当地の日系の教会では最も古く、今年で創立

112年目になりますが、高齢化が進み会員数は減少しております。しかし若い人達が徐々に増えつつありこれから楽しみです。

バンクーバーにいま日系4万人

バンクーバー地域に、在住する日系は、学生・ワーキング・ホリデーの青年を含め4万を越していると推定されておりますが、日本語を話す人(短期滞在者を含む)は、2万数



日系プレース恒例の年末餅つき大会

千人です。更に年間当地を訪問する旅行者が、20万人前後おります。また、カナダ生まれの人や英語圏での生活が長い人でも、年を取るに従い両親の生活環境、食生活、言葉に戻って行く傾向があります。ところが、主として日本語を話す人たちを対象としてきたファミリー・ドクター6名がこの数年の間に次々と退職され、現在は2名だけとなり、他にある程度日本語を話される医師が5〜6名

おられるだけとなりました。このような状態を憂慮して、日系コミュニティの方々が健康で快適な生活を送られるためのお手伝いをすべく、数年前から私と1〜2の医師が、検討を続けて参りましたが、2年ほど前から、ヘルスケアの専門家、ボランティアアたちのグループが活動を開始し、昨年末、日加ヘルスケア協会が設立されました。04年の初めに実施したアンケート調査では、日本語が通じる診療所をぜひ設立して欲しいという要望が圧倒的にありましたが、日

本語を話せる医者不足と巨額の資金調達は現状困難であることから、診療所設立の話は、将来実現可能となりそうな時期まで棚上げし、出来ることから活動を開始しました。即ち、

- ① 日本語・日本文化に理解があり保健や健康管理に造詣の深い医療専門家や医療サービスのネットワークを構築しつつあり、現在約20名が参加しております。

- ② 日本語を話す人達が、カナダにおける医療サービスを利用しやすくするために、現在20数名のボランティアによりネットワークを構築する作業が進められております。

- ③ 健康維持・増進に関する、カナダにおける医療についての話題と日本および他の非西洋医学的な医療サービスや健康管理を理解して頂くための日英両語による教育プログラム・講演会を今年から実施しております。

- ④ 日本語を話す人たちや日系の背景を有する人たちが、当地の医療サービスを利用する際に直面する問題をを見つけ、対応策を段階的に実

施しております。具体的には、カナダ人が一般的に得ている、英語による医療や健康に関する情報を、日本語で当地の日本語新聞・雑誌を通じて提供中ですし、総合病院などに置かれている特定の英語の説明書の日本語訳を段階的に行なっております。

妻よ、亡き父母よ

このように私たち夫婦を動かしているのは、89年東京に短期滞在中、私が胃がん摘出手術を受け、加えて原因不詳の術後肝機能障害のため5ヶ月以上の入院にも拘らず、完治し健康を回復したことへの感謝か



高円宮妃殿下（中央）が日系ブレースを
ご訪問＝04年6月

らでした。余命をどのように生きようかと模索の上、上述のニューヨークでお世話になった方々への恩返しを、同じ北米で、しかも米国の日系よりひどい待遇を受けたカナダ日系コミュニティの第二次世界大戦前からの一世や二世たちにしたいたいという気持でした。そして根本にあるのは、私たちが双方の、クリスチャンであつた両親の生き様を見て育ち、教わり、指導を受けたことが大きく影響しております。私の父は、叔父と飯田市で衣類卸業などの商売をしておりましたが、第二次世界大戦中に病に倒れたため退き、何人かの若い人たちに住み込んで貰い、急仕立ての農家となりました。戦後、乞われるままに村長となり、飯田市と合併するまで田舎政治を盛り立てておりました。当時の村長の給料は、大学新卒の給料より少なく、交際費も殆どないため、随分と自腹を切っていました。そして生活費の不足分と年頃を迎えた私たち7人の兄弟姉妹の教育費を、田畑を切り売りして捻出してくれました。「村長とは「損長」

と書くのだぞ」と父が良く言っていたのを思い出します。母は、住み込みの手伝いの人を含め12〜3人もの大家族の切り回しの他、婦人会や村・集落の諸活動に文字通り精神誠意奉仕しておりました。

恵美子の父は、米国のスタンフォード大学医学部を苦学生として卒業後、ロス・アンジェルズで医者として日系の人々を主とした対象として活躍し、生活に困った人々には費用を請求しない方針を貫いた由でした。また、日本人病院を設立するのにも、他の医者たちとともに随分と尽力しました。そして、戦前日本へ戻り、東京で開業医となり1970年ごろまで名医として活躍しました。

母は文才のあつた人で3冊の本を自費出版しましたが、その鋭い観察力・洞察力には感服します。そして父が医者として立ち上がるのころ、2人の子供を育てるかたわら、事務業務を一手に引き受け、生活に困った日系の芸術家を支援しました。両親は4人とも20年以上前に天に召されましたが、上述のごとく私たち夫

婦の人生の方向付けには大きな影響を与えております。

結婚して44年、子供には恵まれませんでした。私たちが夫婦であると同時に親友であるといえます。新婚当初から、現在まで小言一つ言わずに励ましてくれた妻・恵美子に感謝しております。

楽しき哉「バンクーバー白門会」

最後になりましたが、当地にはバンクーバー白門会があり、会員は25名程度です。最初のニューヨーク時代にニューヨーク白門会が発足した折の創立会員の一人でしたので、その思いから、96年に学Yで一緒だった今泉周治さん（57年法卒）と相談し立ち上げました。年に1〜2回集り楽しくやっております。学員会費を支払った人の数が不足のため、学員会に正式に支部登録が出来ないでおりますが、出来るだけ早い時期に実現したいと考えております。04年には、「白門43会」の皆さんが当地に來られ楽しい交流のひと時を持ちました。皆さんも是非お越し下さい。